

## 「仙台市内の路上生活者の変遷と依存症」

仙台夜まわりグループ理事 青木康弘

ただ今ご紹介いただきました特定非営利活動法人仙台夜まわりグループの理事、事務局長をしております青木康弘と申します。

依存症の学習会でお話ということでご依頼がありまして、気軽に引き受けてしまったのですが、おそらくここにいらっしゃる皆さんは、依存症について深い知見と経験豊かな方ばかりだと思います。専門外の私が、話すにふさわしいのかと恐縮する思いでこの場に立っているのですが、今日は、私が普段携わっております路上生活者支援、生活困窮者支援の現場からの報告というところから、お話しをさせていただければと願っています。

さて、私は、今から約20年前、1999年に、牧師として仙台のキリスト教会に赴任して参りまして、その頃の仙台は、今に比べて桁違いに寒かった。毎冬に大雪が何度も降りましてその度、雪かきに苦勞した覚えがあります。そんな仙台で、当時、市内には200人から300人くらい、路上生活を余儀なくされている方々おられた、で、毎冬10名単位で、路上で亡くなる方々がいたんです。

遠い世界の話ではなく、私達が住んでいる足元で、誰にもみとられずに、毎年路上で死んでいかれる。ところが、当時の仙台市長は、マスコミの取材で、仙台市内にはホームレスはいないからホームレスの支援施策を講じるつもりはない、とおっしゃっていたのですが、じゃあ実際、私たちが出会っている300人の路上生活余儀なくされている人たちは存在しないことにされているのかと思ひまして、つまり、存在するにも関わらず、存在しないものとされる、これ、ホームレスという側面が如実に表している社会の実相、なんだろうと思わされています。ホームレスに留まらず、多くの問題を抱えている人たちが存在するにも関わらず、いないものとされていく、問題があるにも関わらず、見させなくさせていく、放置したままにしていく、という私たちの社会があるのではないか、そのように思わされておりまして、少なくとも私たちが住む仙台、宮城で、誰にもみとられず、路上で衰弱死、餓死という悲しい出来事が起こらないようにしたい、という思いで、3人で週に一回夜まわりを始めました。2000年1月13日のことでした。最初は、ホッカイロと味噌汁をもって仙台市内を巡回しました。体の具体はどうですか？何か困っていることはありませんか？それから毎週一回、木曜日の夜8時くらいにスタートして、居場所を探しながら一人一人に声かけしますから結構時間がかかりまして、午後8時にスタートして、だいたい夜中の3時くらいまで、7時間くらいになるでしょうか、仙台市内や郊外を巡回してまわりました。最初は、警戒して当事者たちは振り向いてもくれなかったのですが、それは、当たり前でありまして、彼ら彼女らは、これまで石を投げつけられたり、酔っ払いに絡まれたり、蹴られたり、殴られたり、ひどい時にはおしっこをかけられたりする被害に

遭っていますから、警戒するんです。でも、毎週、毎週くり返し声かけをするうちに、名前を名乗ってくれるようになり、身の上話しをしてくれるようになって、さらに経歴を話してくれたり、悩み事をうちあけてくれるようになって、彼等の要望に答えるような仕方で、週に一度の夜まわり、から始まった活動が広がりまして、当事者の方々からの、コンビニの冷たい破棄された弁当でなくて、あったかいご飯を腹一杯食べたいという要望に応じて、その年の7月から、第四土曜のカレーの炊き出しを始めました。さらに、食事会とリンクをさせてセミナーを開催して、働く者の権利の話ですとか、最低賃金、公的扶助の利用の仕方などを勉強するセミナーを第一土曜に開始。その他、居宅支援、生活見守り支援、女性のセルター運営、ゆっくり過ごしてもらえるようなサロン活動、シャワーを浴びたち洗濯をする機会の提供、清掃アルバイト機会提供、相談センター*HELP*みやぎ運営、リユース事業、お部屋に入った男性を対象とした料理教室、アルコールやギャンブル依存のミーティング、さらにはネットカフェ長期滞在者や車上生活者の調査等と、活動が広がり、現在に至っております。ただ、これら多岐にわたる活動は、何か私たちの側から、組織を拡大するために広げて来たわけではありませんで、出会った当事者たちから、これに困っている、これをしてほしい、という切なる要望があって、なんとかそれに応えたい、そういうところで一つ一つスタートして、結果的に、現在、ほぼ毎日支援活動をするに至ったという経緯があります。

活動を始めた当初、2000年の時点で、私たちの活動拠点の仙台には、先ほど申し上げた通り、少なくとも300人を下らない路上生活者がいました。仙台市内の路上生活者は、ほぼ全てと言っていいくらい、東北の出身でした。若い頃、金の卵と言われて上京列車で見送られて、一旗あげようと願って、ずっと都会で働いて、働いて、でも年をとって、気がつくと手元に何も残らず、厚生年金もかけてもらえていないことがわかって、行き場もなく、金もなく、少しでも生まれ故郷の近くに来たいと考える。そして、東北でなんとか食べそうな、なんとか仕事が見つかりそうな仙台まで来て、そこで留まって、故郷を思うんです。東京の上野駅や大宮駅から生まれ故郷の東北を思うということ良く聞くのですが、それと同じように、路上生活ができる北限と言われている仙台から仙台駅から東北各地の故郷を思う、そういう方々が20年前は多かったです。ところが、2008年のリーマンショック以降は、昨日まで普通に働いていた人たち、景気が悪くなって、突然生活が破綻する人たちが増え始めました。例えば、大型トラックの運転手をして結構稼いでいたんだけど、突然仕事なくなって、購入したばかりのマンションのローンが払えなくなってしまった。結果、一家離散し、本人が借金を抱えたまま路上に陥った方ですとか、また、キャッシングで生活費の不足分を補って来たけども、利息が雪だるま式に膨れ上がって、多重債務でどうしようもなくなってしまった方とかですね。多くいらっしやいました。さらに、2011年の東日本大震災後は、全国各地から震災復興関連の仕事を求めやってきて、仕事が一段

落した後、次の仕事が見つからずに路上生活に陥ったという方、さらに福島で除染をしていたけれども職と住まいを失って、福島市役所に生活相談に行くと、原発事故で手一杯で対応できない、仙台に行けと送還旅費を渡される。仙台に移動してきて、仙台市内で路上生活を余儀なくされたという方々、たくさんいました。そのほとんどが、5次、6次下請けで除染の仕事をしていて、彼らから、放射線管理手帳を会社が持っていて自分の手元にないから自分がどれくらい被曝しているのかわからないという相談が殺到しました。除染作業の非常にずさんな一面を見たような気がするのですが、10人、20人単位であったそのような訴えに応えたいということで、病院にご協力いただいて、ホールボディカウンター検査、甲状腺総合検診を実施いたしました。そして、昨年から世界中で流行している新型コロナウイルス感染症、路上でもその影響が出ています。特に、2020年3月、4月には、20代、30代の若者からの相談が殺到しました。仕事を失って明日から寝泊まりするところがない、ですとか、ネットカフェで次の日の仕事を決めていたが仕事が全くないですとか。そのような意味で、ホームレスに陥ってしまうというのは、個人の問題、だとか、自己責任の一言では決して片付けられるものではなく、社会を取り巻く状況や国の経済施策に大きく影響していることがわかります。路上は社会の問題の坩堝であり、そこに社会の諸問題が、如実に反映されていくということを実感しています。

ホームレスになる、一線を超えてしまう、それは今申し上げたように、社会的な要因、構造的な問題があります。その一方で、そのような社会、国のもとで生きる私たち、その諸問題の影響で、繰り返し生活の危機に陥ることがある。例えば、家のローンの返済、病気、失業、離婚、あるいは、親の介護等、その度に頑張って乗り切ろうとする、周囲の支援で解決していく、そういう連続が私たちの人生だろうと思います。しかし、それら問題が、複数、あるいは、一度に訪れる、人生の危機が重なる、そういう状況に陥って生活が破綻する、踏ん張りきれなくなって、どうしようもなくなって路上に陥る、誰しもがその可能性あるんですね。そのような意味で、誰がいつどのような仕方でも生活破綻に陥って如何ともしがたい状況になるということ、あり得るんです。私自身も含めてですね。

仙台市内のホームレスの変遷、まとめますと、震災前まではですね、仙台市では、震災前、路上生活者、ひとつの雛型がありまして、だいたい50才後半から60才代後半の東北出身、男性、次男、三男以降。長男は家業や田畑を継ぐ方多い、就職先がない次男、三男は都会に仕事に行く、というひとつのパターンがありました。しかし、東日本大震災を境に、北は北海道、南は奄美大島まで全国から復興関連事業を求めて就労希望者が殺到いたしまして、震災前の50代から60代、東北出身という雛型が崩れてしまって、路上生活者の平均年齢は、震災前の62才に比べて10才以上若返って47才までになりました。それから10年たって、現在は、平均50才代半ばというところで落ち着いて来ています。

厚生労働省では、ホームレス自立支援法の施策の一つとして、毎年1月に全国ホームレス概数調査を実施しています。今年も1月16日に実施しました。実施初年度の2003年は全国で25,296人のホームレスが確認されました。それからずっと減少して行って、今年1月の調査によると全国では3,824人でした。調査初年度の2003年から1/6、1/7くらいになって、そういう意味で右肩下がりに減ってきています。特にいわゆる飯場がある大阪、東京、名古屋、神奈川が顕著です。ところが、仙台では、震災後、横ばい状態でありまして、2003年の203人から、東日本大震災後は100名前後を推移して、昨年2020年は70人、そして今年2021年は76名と、全国では1/6に減少しているにも関わらず、仙台は約1/2、半減にとどまっている。官・民それぞれ施策を講じて、仙台市内では年間、大体50人くらいが路上を脱却しているにもかかわらず、自立を果たした50人分の新たな人たちが路上に陥っているという現状があります。

路上生活至ってしまう原因としては、さまざまでありまして、先ほど申しました通りその時代の社会問題が浮き彫りになるような印象を受けます。それは、経済破綻、あるいは自然災害や感染症による失業であったり、一番最初に首切られるのは不安定雇用にある人たちですから、それに伴う、多重債務であったり、あるいは、家族問題、女性ならDV、であったり。

私たちは、居宅支援もしておりまして、支援は部屋に入れて一丁あがりではない。問題を抱えたままで部屋に入ったとしても、あるいは仕事についたとしても、根源的な問題が解決しない限り、また同じ問題で生活苦に陥ってしまう。そのために、丁寧な見守り支援を実施しているのですが、そのような中で、活動当初から支援に苦慮して来たのが依存症の方々への関わりであります。

活動当初、今から20年前は、圧倒的にアルコール依存症の方が多かったです。時を経て、現在は、支援活動の中で、ギャンブル依存症の方、どうしても賭け事を止められないという方々が増加しています。現在、路上生活を脱却して部屋を確保した方々、80名ほどの居宅支援をしているのですが、80名のうち、病院で依存症と診断された方々は14人。全体の約18パーセントです。その14人のうち、アルコール依存症と診断されたのは3人、ギャンブル依存症は11人。この数字はあくまで、病院受診をして診断された方であって、もしかしたら数字はもっと多いのかもしれない。それでは、ホームレスの人たちどうか。直近の6月5日に、アルコール、タバコ、ギャンブルについて、8つほどの設問のアンケート調査を27人のホームレスの方々に協力してもらいまして、その結果によると、

- ・喫煙率 23人/27人 約85%
- ・恒常的にギャンブルをする、していた 16人/27人 約60%
- ・ギャンブルで借金をしたことがある 6人/27人 約22%
- ・ギャンブルをやめられない 7人/27人 約26%

- ・恒常的に酒を飲む、飲んでいた 19人/27人 約70%
- ・酒を飲んで喧嘩をしたことがある 4人/27人 約14%
- ・酒をやめられない12人/27人 約44%

これは、全国民の平均値に比して、相当高い数字ではないかと考えています。

私たちが関わっている多くの方々は、飯場や寮付きの職場で働いてきた人たちが圧倒的に多いです。一日仕事をして、寮に帰ると食事が準備されていて、寝るところがあって、そういうサイクルの中で、給料日に寮費や食費を差引かれて、残りのお金を手にする。そのお金、をどうするか、自ずとパチンコに行く。競馬、競輪、競艇に行く。酒を飲む。すっからかんになっても、少なくとも今日の飯と寝床と明日の仕事は保障されている。そのように、手持ちの金は全部ギャンブルや酒に使い果たすという生活を若い頃からずっと続けてきた人たちが多いです。ギャンブルの金がなくなると会社から前借りする。それがダメならサラ金から借金する。破綻が目に見えているんです。どうしようもなくなって、寮を飛び出して、路上というパターンが結構見受けられます。ですから、お部屋に入って生活の取り戻しをしようとしてもなかなか難しい。手持ちは全部ギャンブルに使ってしまうという習慣で長年やってきた人にとって、自分で一ヶ月のお金を管理して、食事を作って、光熱水道費をきちんと払ってという習慣が身に付いていない方々多いですから、お金を計画的に使ったり、自炊をしたりというライフスタイルを身につけるには、大変な時間がかかるというのが多くの方々の現状です。

私が支援活動で具体的に出会った事例をご紹介します。

Aさん、Bさん、Cさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさん  
(省略)

これらの人たちは、ほんの一例なのですが、私たちの間でも、ホームレス状態にならないまでも、最後の一线で持ち堪えながら、でもギャンブルやアルコールなどをやめられない人が多いのではないかと思います。そういう方々を支援して来まして、痛感するのは、依存症の回復というのは、本人が強い意志を持って酒やギャンブル等を断つ、だとか、本人を説得してそして本人が頭の中で納得して生き方を変えるという問題に集約されることではないということでありまして、もちろん本人の意思や周りの説得も大事ですが、依存症は、治療が必要な病気であるということ、依存症の方々との出会いで体験的に確信しまして、きちんとして治療をしてくださる医療機関に繋げていくことを大切にきて来まして。ただ、病院から帰って来てからの時間の方が一日の中で長いですから、生活そのものを見守っていくような、ライフスタイルそのものを変えるような、そういうプログラムの必要性を痛感しまして、私たちNPO法人の側でも設定できないか、ということで全くの素人集団なのですが、現在、いくつかの試行錯誤をしています。具体的には・・・

・居宅支援をしている方々に対して、月一回の自助ミーティングを私たちが主催して実施しています。この6月8日で64回目を迎えました。

・第二第、三第、四土曜朝9時から1時間、清掃ボランティア活動を行なって皆でゴミ拾いをしています。

・最終火曜の午後に、レクリエーションを行なっています。

残念ながらコロナの影響で外出できず、ここのところ映画観賞会が続いていますが、コロナ禍が一段落したら外に出かけていくプログラムも実施したいと思っています。そのほか、毎日一回お部屋を訪問して安否確認をしたり生活相談を受け付けます。そのほか病院に同行したり各種手続きの支店等をしています。そのようにゆっくりですが、取り戻し。趣味を見つけたり、仕事に復帰したりしています。

今の日本の社会というのは、自己責任論が闊歩していて、何か課題を抱えたり、問題が生じると、それはお前自身が悪いのだろう、と簡単に言ってしまうたりする。でも、ギャンブルや酒で失敗したお前が悪いと簡単に片付けられない、それだけでは済まされない何かあるような気がします。人と人を分断する社会、勝ち組-負け組という二極化が進んで、ぼやぼやしていたら置いてきぼりを食うというような社会の構造の中で、家庭環境もそれに伴ってどんどん乾いていきます。お父さんお母さんも生活苦で、家庭がギスギスします。みんな乾いてしまって、憂さ晴らしにアルコールに走ったり、ギャンブルをしたり。そういう依存症を作り出していく、そういう世の中になってきてしまっている感があります。そういう歪みのある社会の構造に、ノーと拒否感を抱いていくのは、ある意味当たり前でありまして、それが表出するのが、ギャンブル、アルコール依存だったり、摂食障がい等々だったりするのではないかと思います。もちろんそういう社会構造の歪みがあるから、みんながみんなそうなるのではない。でも、私は、そういう社会の歪み、それに伴う家族間の渴き、逆の意味での家族間の過度の癒着、それらにノー、嫌だ、と拒絶してしまう、もしかしたらそれは当たり前の、私たちの自然な反応なのかもしれないと思うのです。こんな世の中やっつけられない、こんな環境じゃ生きられない、酒でも生なきゃ自分が壊れてしまう、パチンコやらなきゃつらい浮世の憂さを晴らせない、そういうところで、ギャンブルやアルコールにのめり込んでしまう、人たちが今後、ますます増え続けていくのではないかと、そう思っています。

私たちを取り巻く状況、この間の国の動きも私は大変危惧しています。2018年7月20日に、いわゆるIR法（カジノ解禁含む統合型リゾート施設法）が公布されました。しかし、今の日本では、すでにギャンブルの機会が溢れています。パチンコ、パチスロ、競馬、競輪、競艇、オートレース、宝くじ、スポーツくじ等々。そこにさらにカジノをつくるというのです。日本において、ギャンブル依存の疑いのある人は、320万人とも言われています（厚労省 2018年）。日本は、ギャンブル用ゲーム機の台数は世界一、400万台もあります（世界中のギャンブル機台数の60%）。

繰り返しになりますが、依存症を作り出している環境、社会の構造、社会のあり方に、依存症を作り出す原因の一つがあるように思うのです。ですから、今後も、微力ながら、プログラムをさらに策定し、日常生活での関わりや、一緒に回復をしていく、ここにおられる医療関係の皆さんと、できますなら、連携をさせていただく、また、一方で、そういう歪みを作り出している社会を変えていく、人と人との関係を変えていく、もう、うさを晴らすために酒を飲まなくていい、ストレス発散のためにギャンブルやらなくていい、という社会、創り出していきたい、今、苦しみのある方々のその苦しみの根源的な原因を見抜いて、回復へと提案をしていく活動を続けていきたいと考えています。

ご静聴ありがとうございました。

(2021年6月10日「宮城県アディクション問題研究会」講演より)